

末黒野

平成二十四年九月五日発行

第六十七巻第十号（通巻七九四号）

# 末黒野

すぐろの

10月号

（通巻794号）



# 入院記（三）

小川玉泉

天馬もて駆くる夢覚む梅雨の雷  
棟の端に止まるは習ひ梅雨鳥  
看護師の声よく透り梅雨の晴  
梅雨夕焼深め動かぬちぎれ雲

朝焼の森カーテンの隙間より  
大学の校舎の窓の大夕焼  
雀ほどの身となり潜りたき茂り  
鳴焼の何とあたたか患者食  
尾鰭まで蘭鑄に似る雲涼し  
白南風を受け止め校旗ひるがへる  
素麺のよく冷えてをり患者食  
朝曇り小屋を発ちたる鳩の群

# 河童忌

松本三千夫

尺ほどの島の祠や梅雨の蝶  
灯台を臨む食堂灯の涼し  
仏具屋の金の仏具や西日中  
金の日を浴びて白蓮宝珠解く  
蓮浄土生き物のゐて水動く  
炎天の雲の若さや草田男忌  
片陰を拾ひてかこつ齡かな  
河童忌やトンネル多き町に住み  
縋るものあれば選ばず凌霄花  
神輿舁くをんなの締めて男帯  
鎌倉に似合ふ和服と日傘かな  
御用邸跡の公園滝涼し

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 網戸

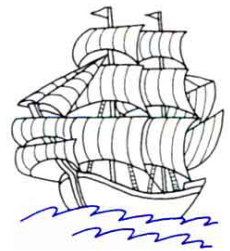
田中臥石

さくらんぼ甘しふるさと出羽の産  
父母の亡き家残りをり立葵  
日に映ゆる結城紬の単帯  
沖曇り上総麓田苗育つ  
漁師来て盥にどどと鰯分つ  
浜木綿や放尿の子へ喝一語  
鰯叩く妻やいきなり浜言葉  
窓開く網戸に朝の潮雫  
端居して酒麴なきを口に出づ  
徒然の風鈴愉し文机

## 実梅

大橋伊佐子

後戻りできぬ人生衣更ふ  
花苔やたしなみに引く紅薄く  
闇に泛かぶ泰山木の匂ひかな  
雲にふれ朴は拳を開きけり  
実梅もぐ雫の綺羅をふりかむり  
樹々覆ふ溪の暗さや昼河鹿  
宿の灯の瀬川にこぼれ河鹿笛  
噴水の洗ひ上げたる空青し  
鐘撞いて合歓の暮色を誘ひけり  
滝音の餌豊かに森深し



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

ほうたる

石黒興平

泰山木

岡田史女

閉ざされし靈廟よぎる夏燕  
潮入りの堰の遺構や浜万年青  
時折の水車の軋み初蛩  
**ほうたるやいつしか水の音更けぬ**  
落ちてなほ白を尽くせり沙羅の花  
木道の鏝錆びぬ水芭蕉  
しんがりに氣息を合はせ登山帽

あまだれの音遠退きぬ籐寝椅子  
ジャズの音の洩るる駅裏夏燕  
泰山木寂ぶ日輪へ花かかげ  
**従心てふ出発点や浮いてこい**  
丹沢の山嶺けぶり花あやめ  
水口の水照りかげり蛇莓  
竹林の奥の人ごゑ岩煙草



風青し

岡野里子

夏の雲

加藤静江

校庭に弾む雨脚立葵  
水門の堅く閉ざされ風青し  
路違へしか十葉の花明り  
七変化雨の重さの彩かさね  
竹煮草揺れをり雲の流れをり  
茉莉花の放つかほりや闇の庭  
笹竹を肩に園児ら梅雨晴間

老鶯

小倉正穂

道の駅菅

野日出子

深き闇千々に乱して恋蛩  
傘いらぬと金糸梅咲く明るさに  
原節子のその後は知らず夏つばき  
戦争も飢ゑし日も過去さくらんぼ  
老鶯に山の一服つい長し  
喪歸りの匙ゆつくりとかき氷  
生き甲斐の一つに俳句夜の秋

隙間なき竹林の闇梅雨深し  
日照雨すぎ白さを残す山法師  
風に乗る蝶の眩しく梅雨晴間  
竹林に抜け道ひとつ風涼し  
鷺降りぬ植田の水の満々と  
小流れの水の支ふる植田かな  
薯洗ふ水車の音や夏の雲

大島は模糊と虹立つ海<sup>わた</sup>の原  
子燕の犇めく軒や道の駅  
突堤の太公望や梅雨の隙  
ホテルの灯絶えて久しや花蘇鉄  
傍らに亡き夫の影蛩の夜  
本堂の裏の遣水半夏生草  
丁字路の馬頭観音葛の花

## 青炎集

千葉

鈴木礼子

廊に坐し緑に憩ふ古刹かな  
作業衣の二着を干しぬ梅雨庇  
菜園を渡り来る風網戸越し  
浜名湖に梅雨の夕日の沈みけり  
朝焼けの空を映して湖しづか  
父の忌の供ふる麦酒大ジョッキ

千葉

岡井マスミ

夏柑の熟れて挽がれず山の畑  
青田道遠目に著き朱の鳥居  
鬼灯市鉢の麻紐ゆるみなき  
声嘎れて鬼灯市の乙女かな  
鬼灯籠提げゆく人や裏通り  
開業の六区のホテル夏柳

## 小川玉泉選

横浜

岡本ヨシエ

少女らの憩ふ芝生や振れ花  
ゆるやかに人流れゆく花菖蒲  
母と子に賑はふ池や花菖蒲  
屋顔の垣根を覆ふ山家かな  
草むらや落ちて母待つ鴉の子  
夫の足底ひ茅の輪をくぐりけり

横須賀

大川暉美

釣舟の影絵のごとし大夕焼  
梅雨晴やグランドに置く大薬缶  
雨音にまさる風音梅雨荒るる  
捨つるべき物捨てきれず更衣  
卒寿伏せ若くおしやれなサングラス  
姉の忌や思ひ出ちちに梅雨深し





横 浜 高 橋 定 峰

うだち上ぐる蔵の川越夏つばめ

桑いちご食みつつ覗く村芝居

草笛のひろがる空や夕茜

**梅雨夕焼牧舎に戻る牛の列**

九十九里の礁に砕け夏怒濤

さつば舟あやめの岸に棹を入れ

横 浜 上 村 光 八

暈なはる波の向かふに雲の峰

風来ては風に攫はれ糸とんぼ

雲切れて朝日に映ゆる花石榴

山青葉古刹を包む風清し

**高々と弧を描くまで草矢射る**

鈍色の雲の重たき梅雨湿り

横 浜 美 田 茂 子

**先ず杖の先よりくぐる茅の輪かな**

形代に豊かな流れありにけり

滴りて隧道暗く響きけり

擦れちがふ赤き半被の祭稚児

糠床の匂ひを拡げ梅雨厨

開かむと白き秀をたて蓮の花

横 浜 神 谷 さ う び

椎の香の風に乗り来る一輛車

**菖蒲園いづこに佇つも水の音**

古井戸の水面に届く新樹光

青荻のトンネルを抜け園眩し

降臨を待つごと蓮の浮葉かな

梅雨蝶を追うて道順逆しまに

横 浜 占 部 美 弥 子

**夕風の沖行く巨船滑ること**

観音の馬頭顱に梅雨の月

遊女塚癒すごとくに杜若

寝そびるる目に窓よりの梅雨の月

昨夜の雨葉先に宿り揚羽蝶

父母とかつて来し丘ねむの花

横 浜 加 藤 八 重 子

控え目に暮す幸せ茄子の花

梅ゆる事多き一ト日や額の花

寄るとなく離るとなく蛩舞ふ

何よりも若さが欲しや夏料理

**白日傘廻しさみしさ紛らはす**

寝入りたる曾孫の手ゆるみ団扇置く

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



刺身皿烏賊ピクピクと生きてをり 横浜 山口 登  
杣の道草笛吹きて足軽き

隈取りの汗にくづるる村歌舞伎

夏日受け影くつきりと摩天楼

蘭の花開店祝ふ首座を占め

躊躇ひの蜚分け入る闇の奥 東大和 谷口 律子

雨粒のびつしり蜘蛛の囀の撓み

雨恋し妻の恋しと牛蛙

菖蒲揺らすトトロの森の吐息かな

墨の香や大書する背に汗滲み

野良猫の樹上に憩ふ大暑かな 横浜 都留百太郎

そそくさと着替へて襦袢の地鎮祭

豪雨後の地響きをあげ滝飛沫

尾の先は起きてゐる猫夏木蔭

尺八吹く折目正しき夏袴

相模原 内田 梢

郭公や朝の大氣をほしいまま  
夏の蝶池塘の水を弾きけり  
折紙の子の指撓ふ梅雨籠り  
来し道に光残せりなめくぢら  
風鈴の舌に程良き風来たる

パセリにも生命托して黒揚羽 横浜 宮地 静雄

七夕やよろず頼まれごとばかり

水無月の淵や河童の水しぶき

遠花火遊子の友と時惜しみ

抱卵の鳩と目の合ふ雨上り

ほうたるを採す闇夜の広さかな 山咲 和雄

大夕焼やがて寂しき日暮かな

時の日や電池切れたる鳩時計

雨垂れのメロディーかさね梅雨最中

蛩や一筆書きの光の輪